

# Computer Report

Vol. 52 No. 12 12月号 (通巻 699号)

## はじめの言葉

■一年の総括という一番慌ただしい中での衆議院総選挙である。国民が納得できる政策よりも、政局だけを繰り返す政府に慣れっこの国民には驚くものはない。マスコミには連日、大はしゃぎの各党党首が顔を出している。呆れるほどの数の党が乱立している。「決められる政府を目指す」などと、演説だけは分かったふうで、派手で立派なのだが、自分の所属政党すら決められない者ばかりだ。端から「正体見せたり」だ。

■明治維新前夜に登場した坂本龍馬という英雄が提案したと言われている「船中八策」。欧米そしてロシアという列強の進出に対抗するには、それまでの分権体制である幕藩体制をひとつにまとめて日本という堅牢な中央集権国家を目指すべきだというのが、その背景であり、その要諦だといわれている。未曾有と言えるほどの政党乱立の有り様は、ひとつに纏まるどころか、いつまでたっても離合集散を繰り返すだろうとしか思えない。

■過日、大手企業の元情報システム部門長で、現在、システム関連のコンサルティング企業を営んでいる仁の話聞く機会があった。この仁、昨今の風潮である「丸投げアウトソーシング方式」に警鐘を鳴らすとともに、自社内のシステム要員の育成を訴えるなど、気骨のある仁として知られる。今時では、非常に珍しい存在だということになっているが、ほんの一頃前では、ごくありふれたシステム部門長のタイプである。

■かつて、ごく普通のタイプとされたシステム部門長が、珍しいと思われるのは、世の中の常識が変わったということだろう。ただ、変わった世の中にあっても、結構注目を集めるということは、彼の基本とする自社のシステム要員育成論を支持する気持ちが周囲に残っている証左だろう。少なくとも、羨望の念を抱く衆意があるということのようだ。不思議なのは、羨望の念を持ちながら、かの仁を追従する動きが出てこないことである。

■かの仁、某大手企業にあってシステム部門長から役員にまでなったのだが、元はと言えば、一事業部門のシステム化担当だったそうだ。いわゆるエンドユーザー部門でやったことは、全社的な最適化を図る情報システム部門からみると異端システムの推進だったようだ。が、一端、全社レベルのシステム部門長になるや、従前の彼自身の所業を忘れたように全社統合化を推進し、一貫として情報システム子会社の親会社への併呑統合もしている。

■立場／立ち位置が変われば、やることも変わらなくてはならない。当然である。地方の首長経験者が、その矛盾解決のために国政レベルでの参加を目指すに至ったという声が強調される今度の国政選挙だが、特に、スローガンとしての原発の是非論は果たして国政選択のメインテーマなのかどうか。何やら、大規模メインフレームか、パソコンかといったテーマの設定に似ている。その一歩先が見えてこない。

■「万国の労働者よ、団結せよ」と呼び掛けた共産党宣言。そのイデオロギーのもとに建国された共産主義国家中国が、今やマルクス／エンゲルスの時代を遙かに凌ぐ、超格差社会／労働者弾圧国家となっている。その中国は、共産党幹部の子弟からなる太子党という集団から国家主席を選んだ。太子党とは、ようも言ったり。だが、これを笑えないのが、日本の世襲議員たちの存在である。日本国民の選択やいかに。(藤見)